

# 「現代湯治」じわり浸透

三朝温泉・木屋旅館社長 御船 秀さん (60)



この人、  
この一言

古き良き湯の宿。ようやく「こ」にたどり着きました

とっとり  
100人  
100通り

湯船の底から時折、ポコッ、ポコッと気泡が浮かんで割れる。「ヘリウムガスです」と、木屋旅館社長の御船秀さん(60)が説明してくれた。「三朝温泉は湯脈が浅く、湯船のすぐ底が湯つぼ。源泉がじかに湧き出しています」

三朝町の三徳川左岸は古くからの温泉旅館が軒を並べる。世界有数のラジウム温泉が自慢だ。

御船さんが最初に案内してくれたのは「手掘りの湯」。地面から約2分の半地下にある。天井を見上げると四角柱の大きな換気塔。床は地熱でぽかぽかと温かい。隅に「枕湯」と書かれた小さな湯ため。温度は約70度。木のふたを開け、ラドンの湯気を浴びながら、備え付けのひしゃくで湯をくんで飲む。まろやかだ。

木屋旅館は、明治元(1868)年創業の老舗温泉旅館。御船さんは、8代目だ。大学卒業後、箱根の「彫刻の森ホテル(当時)」で1年、県内のホテル大山で1年半の経験を積み、1978年9月、実家に戻った。

木造3階建ての旅館は、明治、大正、昭和の各時代に計4回の増

築を重ねたが、「昔ながらの湯治旅館がそのまま残っている」と評価され、国の登録有形文化財になっている。2度の改装も昔の雰囲気を残し、徹底して「古き良き湯の宿」にこだわったという。

バブルの時代は、三朝温泉も例外なく、宿泊客が押し寄せた。ホテルや旅館は規模拡大の建て替えブームに沸いたが、木屋旅館は、21あった部屋を12に減らし、もてなしと効率重視の道を選んだ。

大型観光バスで大勢の客を迎え、派手な大宴会……。そんな時代が昔語りになって久しい。大型投資があたになった旅館もある。温泉街に約40軒あったホテルや旅館は約25軒に。宿泊客もピークの55万人(96年)から、一昨年35万人、昨年32万人。長引くデフレで宿泊料金の低価格化も進む。

「1泊2日の夜型(宴会)から、長期滞在型の湯治と観光の保養地にしなければ……」。古くから湯治場で知られる三朝温泉の名の由来には諸説あるが、「三つ目の朝を迎えるころには病が消える」——もその一つだ。

御船さんが長らく温めてきたアイデアが「現代湯治」の名称で浸透してきた。町内には、岡山大学病院三朝医療センターと、三朝温泉病院があり、ラドン温泉を活用

した熱気浴療法や鉱泥湿布などの温泉療法に取り組んでいる。「医療施設と温泉旅館が連携すれば、健康志向のメディカルツアーなど、新しい時代の湯治のあり方が提案できる」と確信している。

「現代湯治」加盟旅館には、入浴アドバイザー「ラヂウムエ」の有資格者がいる。入浴法を指導してもらい、旅館側が医療機関への診療申し込みを代行する。現代湯治客には食事のカロリーなど健康志向のもてなしをする。「三朝温泉ブランドを高めることが、将来に生き残る道」と御船さん。

三朝温泉再生の切り札である「現代湯治」の成功にかける思いは誰よりも強い。

## その節は...

木屋旅館にはいろいろなお風呂がある。蒸し風呂「穴ぐらの湯」、源泉掛け流しの手掘りの湯、飲泉……。ひとしきり取材したあと、地熱で部屋を暖める「オンドル」に入った。カラッとして気持ちがいい。御船さんと一緒にあぐらをかき、小一時間ほど世間話。「そのうち体中熱くなりますよ」の言葉通り、顔が少々火照ったところで退室。ああ、気分爽快。(寺尾康行)